都道府県別賞一等

保険は愛情

東京都 国分寺市立第四中学校 三学年

島田 愛子

「保険は愛情だよ。」

郵便局に勤めている父は、私にそう話した。郵便局は様々な種類の保険を取り扱っている。私の父は、今は窓口の最前線で保険に携わる役職ではなくなってしまうが、この時の気持ちを忘れずに、社員さん達に指導をしているという。

父が二十代の頃、窓口に座って仕事をしていると、三十代前半くらいの女性が自動ドアから入ってきた。女性は、髪はボサボサで顔面蒼白、声に力もなく、明らかに普通ではない様子だった。死亡保険金の請求と子どもの学資準備のための保険の契約者変更がしたいというので、父は手続きと必要書類の説明をした。

その女性が帰ろうとした時、局内で別の手続きに来ていた女性が話しかけた。

「突然大変だったわね。」

「元氣出してね。」

どうやら亡くなったのはその女性のご主人で突然倒れ、まだ小さい双子の男の子達を残して亡くなったらしい。

それから、様々な手続きのために何度か局へ来てもらった。回数を重ねるごとに女性は少しずつ元氣を取り戻し、最後にはお化粧をして、双子の子ども達を連れて来てくれるようになった。

「島田さん、私、主人が入ってくれていたものと同じ保険に入りたいです。いつ何があるかわからないから、私も主人と同じように、子ども達のために残してあげたいんです。」

女性はそう話して、養老保険と二つの学資準備のための保険に加入してくれた。女性は夫を亡くし、二人の子どもを抱えて自殺も考えたという。そんな時に、夫がかけてくれていた保険が生きる希望を与えてくれた。「生前の夫からの愛情を感じ、これからを生きていく勇氣を持つことができた。」と女性は話した。

確かに、突然ご主人を失い、絶望感に苛まれていたであろう。死を考えてもおかしくない。そんな時にご主人がかけてくれていた保険は、女性に時間を与えてくれた。残された家族の生活は続くが、そのためには仕事を探し、保育園を探さなくてはならない。ご主人を想い、悲しみ、日常を取り戻すまでの時間を、保険は経済面で支え、精神面を支えた。父はこの経験から、「今まで以上にお客様とご家族のために、保険を『売る』のではなく、『提案』してい

第60回中学生作文コンクール

こうという使命感が湧いた。」と話してくれた。

私は、「保険は相互扶助」という程度の知識しか持っていなかったが、こんなにも誰かの人生を支え、生きる勇氣や希望になっているということを知り、感動した。そして、保険に携わる父を改めて尊敬した。

全ての手続きが終わり、女性が新しく加入した子ども達の保険の面接のために、父はご自宅へお伺いした。玄関にはご主人と子ども達との笑顔の写真がたくさん飾ってあった。子ども達が玄関に出てしまわないようにリビングルームのドアにはゲートがつけられていた。かわいい二人の男の子がそれにつかまり、隙間から父を見ていた。

「パパ？」

「パパ？」

「ちがうよ。」

聞こえてくる会話に父は涙があふれた。子ども達は「パパが死んだ」ということを理解していない。ご主人は朝、玄関で倒れ、そのまま亡くなってしまった。子ども達の中では、パパは「いってきます」のままだ。『こんな小さな子達を抱えて、残された奥様は本当に不安だったし、悲しかっただろう。』と父は思った。

愛情を形として表した保険は、パパからの最後の最高のプレゼントになった。